

非暴力平和隊・日本(NPJ) ニューズレター

第42号

2012年2月28日発行

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 1 階 A 室

Tel: 080-6747-4157 E-mail: npj@peace.biglobe.ne.jp

Fax: 03-3255-5910 Website: <http://np-japan.org/>

Nonviolent Peaceforce Japan Newsletter

・ 巻頭言	共同代表	君島 東彦	2
・ NPプロジェクトの現況	理事	大橋 祐治	4
・ 「脱原発」の活動を始めて	会員	小林 善樹	5
・ 核との決別を一「脱原発世界会議」報告	理事	大畑 豊	6
・ 浜岡原発の訴訟と市民活動について	会員	日置 祥隆	7
・ 上関原発計画をめぐる状況について	理事	前田 恵子	8
・ 原発体制を問うキリスト者ネット	理事	大橋 祐治	9
・ 求められること、できることなら何でも	理事	安藤 博	11
・ 9条の輪をじわじわと広げよう	会員	川辺希和子	14
・ 2012年1月会計報告	理事	大橋 祐治	15



南スーダン NPチームの活動

非暴力の平和維持活動はまだ始まったばかりである ——NP設立10周年を迎えて——

君島東彦

わたしは非暴力平和隊の構想とであった日のことをよく覚えている。2000年5月、ニューヨークの国連本部でミレニアム・フォーラムというNGOの会議があった。これは、2000年に開催された国連関連の会議の1つである。国連加盟国政府の首脳が一堂に会したミレニアム・サミットが9月に開催されたが、それに先行する地球市民社会の会議としてミレニアム・フォーラムが開催されたのだった。ミレニアム・フォーラムには、さまざまな分野のNGOの代表者・関係者が参加していた。わたしはハーグ平和アピール日本の代表として参加した。ハーグ平和アピールとは、1999年にオランダのハーグで開催されたもっとも包括的な平和NGOの会議である。

ミレニアム・フォーラムには、非暴力平和隊の提案者、デイヴィッド・ハートソーとメル・ダンカンも参加していて、会議の場で、非暴力平和隊の提案をしていた。この非暴力平和隊の提案は、実は前年のハーグ平和アピールのときにもなされていたということをそのときに知った。ミレニアム・フォーラムの会議のあと、国連本部の近くのレストランで、デイヴィッド・ハートソー、メル・ダンカンらと一緒に夕食をとった。そのときにティム・ウォリスも同席していた。そのときの話題の1つは資金調達の問題で、すでに日本財団のことが話題になっていた。

非暴力平和隊の提案を知ったとき、わたしは「これだ」と思った。冷戦後の1990年代、国連が承認した武力行使として湾岸戦争があり、世界各地で国連PKOが活発になった。また、ユーゴスラビアにおける紛争も激化し、1999年にはコソボ紛争に対するNATOの武力行使が人道的介入であると主張された。平和NGOの会議「ハーグ平和アピール」は、NATOのユーゴ空爆が行なわれている真最中に開催されたのだった。「平和をつくるための軍隊派遣・武力行使」が主張されるなかで、日本政府は「国際貢献」のための自衛隊派遣を追求した。さらには、日本国憲法9条が邪魔になっていて国際貢献できない、国際貢献のために9条を改正すべきだ、という議論も強くなった。これに対して、憲法9条の価値を擁護する側の対抗案は不十分だったと思う。たとえば、国連PKOに派遣するための別組織をつくるという提案があったが、これは実現しなかった。

平和をつくるために、戦争に反対することは重要であるが、それだけでは足りない。世界各地で絶えず起きている紛争の暴力化、人道的危機、甚だしい人権侵害に対して、それをとめるための行動が求められる。そして、それらが起きてしまってから対処するよりも、予防する方がベターである。90年代のひとつ

のテーマは、予防外交、武力紛争予防である。92年に発表されたガリ国連事務総長の報告書『平和への課題』は、予防を重視した。

このような状況で、デイヴィッド・ハートソーとメル・ダンカンが提案した非暴力平和隊の構想は画期的であり、魅力的であった。日本国憲法の平和主義は、日本の政府と市民に対して、武力行使をしないことと同時に、平和をつくるための非軍事的な積極的な行動を求めている。非暴力平和隊の活動はまさに日本国憲法の平和主義にもっとも適合的な活動であると思った。それゆえ、わたしは「これだ」と思ったのである。2000年の11月末から12月はじめにかけて、デイヴィッド・ハートソーが来日し、非暴力平和隊の構想を日本のNGO関係者に説明した。このときに、非暴力平和隊・日本サポートグループができた。これが非暴力平和隊・日本の起源である。

2000年から2002年にかけて、デイヴィッド・ハートソーとメル・ダンカンが中心になって、世界中の平和運動との連携をつくりだした。非暴力平和隊を設立するための国際運営委員会がつけられ、わたしも参加した。

非暴力平和隊を立ち上げるための国際連携は、キリスト教平和思想、ガンディーの非暴力思想、日本国憲法の平和思想等、世界の非暴力平和思想の連携でもあった。2002年12月にインドで非暴力平和隊設立総会が開催され、非暴力平和隊が正式に発足した。設立総会は、最初のパイロット・プロジェクトをスリランカで行なうことも決めた。

非暴力平和隊の活動は、国際平和旅団 (Peace Brigades International) などの活動を参考にしているが、NGOによる非暴力的介入、あるいは非武装の市民による平和維持活動はまだまだ新しい。手探りの模索、試行錯誤の連続になりがちであるし、資金調達も一苦勞である。しかし、軍隊によらずに紛争地の人々の命と人権をまもり、彼らが非暴力的に平和構築をできるようにまわりから支援するという非暴力平和隊の活動をやめることはできない。現在、非暴力平和隊は、南スーダンと南コーカサス(特にグルジア)で新しい活動を始めている。人類の長い歴史、軍隊の長い歴史を考えると、10年はあまりにも短い。この試み、努力はまだ始まったばかりというべきである。

❀ Book Guide ❀

『帝国解体—アメリカ最後の選択』 岩波書店

チャルマーズ・ジョンソン著／雨宮和子訳 2012年 2000円+税

9/11攻撃を予想し、基地帝国アメリカを厳しく批判してきた米国人政治学者による渾身の遺著。海外軍事基地を撤去することがアメリカ共和国の再生にとっても、公正で平和な世界にとっても必須であることを説く。

NPプロジェクトの現況

理事 大橋 祐治

NPウェブサイトにて2月初旬、各プロジェクトの現況が掲載されていまして、いくつかの主要事項を紹介します。

南スーダン・プロジェクト



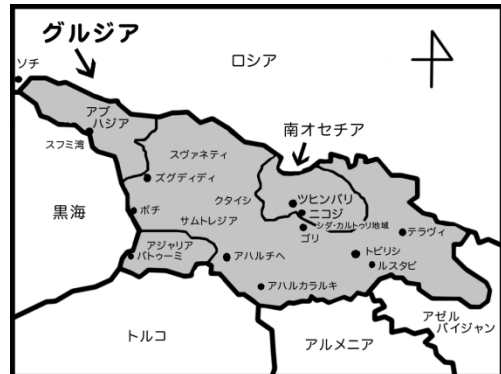
NP活動拠点は2月末で5州、8拠点に拡大する予定。最初の活動拠点であった西エクアトリア州ムンドリ拠点は使命を終えて1月末に閉鎖されました。(農耕民族と放牧民族との紛争)

- ・ヌザレ(Nzare)郡、西エクアトリア州:コンゴの国境と数キロの地点にあり、LRA(神の国軍)の侵入による子どもの誘拐(兵士)、女性の保護が目的
- ・レイク州:西エクアトリア州との州境での農耕民族と放牧民族との紛争解決
- ・ジュバ市、中央エクアトリア州:本部とスーダンからの帰還難民の定着のための支援(子ども、女性の保護など)
- ・女性CPT(平和維持部隊):西エクアトリア州と中央エクアトリア州の女性の保護
- ・ユニティ州:スーダンとの国境で帰還難民の緊急支援(地域村落との調整・・・水、食料、

土地問題など)

- ・ジョングレイ州:3部族間の紛争。UNHCRの資金援助により、NPは3チーム(各部族)を編成・派遣

南オセチア・プロジェクト



昨年末、ベルギー政府の資金援助が成立し活動が開始された。現在、2名のICP(国際市民平和維持活動家)と2名のLCP(地域活動家)が活動、南オセチアに隣接したシダ・カルトゥリ(Shida Kartli)地域のニコジ(Nikozi)村に拠点を設置。2008年の南オセチア紛争によりこの地域の30余の村落が分離帯によって分断され、村落の交流、コミュニケーション



が遮断された状況にある。この地域のNPの拠点の目標はこれらの村落間での対話の実現である。現在、この地域にはNP以外には国際機関の拠点は無い。

「脱原発」の活動を始めて

会員 小林 善樹

昨年3月11日におきた福島原発の破局的事故を受けて、脱原発を求める声が国内で沸き上がりましたが、札幌から西に70km 離れている後志支庁泊村に3基の原発を抱えている北海道でも、Shut泊という小さな市民グループが発足して声を上げています。もと機械工学エンジニアの私も参加して目下没頭しています。死ぬまでにはなんとか原発を廃止に持ち込みたいという執念で取り組んでいます。

私の原発との関わり合いは、兵庫県で田舎暮らしを始めたころに起きた美浜原発2号機の蒸気発生器の細管破断事件でした。大阪の図書館まで通って詳細を調べた結果、加圧式の原発というものは、米海軍の原子力潜水艦の原子力発電装置の設計を基本的に踏襲して小型軽量化を追求したもので、陸上での民生用としては適切な設計とは言えないな、ということを見極めました。その後、NGO「ストップ・ザ・もんじゅ」に加わり、高速増殖炉は絶対にやめなければならない危険極まりないものと見定めていました。今回の福島原発の破局で沸騰式の原発の構造がわかりましたが、あれは、加圧式原発をコストダウンした設計だ、と言えますね。

泊では現在3号機だけが運転中で、これが5月に定期検査に入るのが、日本全国で原発ゼロとなる記念すべき日になるという光栄ある(?)最後の原発なんです、そんなに待てぬ、今にも大地震が発生するかもしれぬのだから、直ちに停止すべし、という行政訴訟を昨年8

月に起こし、その原告の一人になっています。12月14日に第1回公判が開かれたのですが、原告側口頭弁論で短時間ではありましたが、一世一代の大舞台でおしゃべりして来ましたが、もうひとつ泊原発3基の廃炉を北海道電力に求める民事訴訟は昨年11月に出されましたが、これにも原告として参加しています。また、青森県の大間で建設が始まっている原発の差し止め訴訟が、対岸の函館(私の故郷)で起こされていますが、それにも第3次の原告になるよう申し込んだところです。

2月13日に開かれた民事訴訟の第1回公判では、被告の北海道電力は答弁書で次のように表明しました。すなわち、科学技術を応用した装置と言い張り続けてきた原子力村側が、おそらくは初めて「危険なものなんだ」ということを表明したものだ、と受け止められており、今後の全国の訴訟にも影響を及ぼすものと注目されています。

先般横浜で開かれた「脱原発世界会議」には、北海道での活動を紹介するとともに、全国の仲間との交流を目指してブースを開きました。一般的にあまり知られていないようなので、この機会にふれますが、北海道の北端の稚内市の近くの幌延には「核廃棄物深層地層処分の研究施設」という名前で深い縦穴が掘られています。深さ350m・の計画で、現在250mくらいまで掘り進んでいるのですが、出水に悩まされているようです。核廃棄物の処理場にはしないという協定は一応あるのですが、情勢次第で破棄されてしまう恐れがないわけではなく、反対運動が行われています。

核との決別を―「脱原発世界会議」報告―

理事 大畑 豊

1月14・15日に横浜で「脱原発世界会議」が開催され、約30カ国100人の海外参加者を含め、2日間で計1万1500人が参加しました。NPJも、阿木共同代表や私の属する非暴力アクションネット(HANET)との共同企画で参加しました。HANETは非暴力トレーニングを各地で展開してきたグループで、核燃料輸送阻止の座り込みや監視、抗議行動などをおこなって行なっていましたが、フクシマの事故をきっかけに再結成されました。NPJは、放射能測定活動への財政的支援はしているものの、原発や放射能に関する直接的活動はしていないのですが、放射能・原発という暴力的文明に対し、ガンジーの唱えた非暴力の社会への転換、文明の根底からの問い直しを訴えると共に、世界の反原発の非暴力直接行動の動き等について、参加者と共有する場にてできたらと企画しました。

どれだけ参加者の関心と呼ぶことができるかと不安でしたが、ガンジーやキング牧師の映像を常時流したり、壁には非暴力行動のイラストを貼り付けたりしていたので、「？」と立ち止まってくれる人も多く、非暴力についてももちろん平和隊の活動にも関心を示してくれる人も割といました。またHANETメンバーの中には現在自然食品店をしながら放射能測定所を開設したり、被災地での障がい者施設支援などをしていたりしている人がいますので、測定器を持ち込んで即席の食品測定講座を開いたり、障がい者施設の物品を置いたり、なんでもありのコーナーとなりました。茶

菓子なども用意していたこともあり、ゆったりとしたサロンの雰囲気の中で立ち寄った人たちとの思いを共有できた、いい空間を会場のなかに作れたのではないかと思います。久しぶりにNPJ会員／関係者の方々ともお会いすることができました。会議では多くの企画が展開されましたが、ドイツのゴアレーベンで去年11月に行なわれた、核廃棄物郵送阻止の非暴力直接行動の報告会が、その行動にも参加した俳優の山本太郎さんも迎えて急きょ企画されたのですが、聞きに行くことができず残念でした。

会議では「原発のない世界のための横浜宣言」「東アジア脱原発・自然エネルギー 311人宣言」が採択され、「私たちはいま岐路にあり」「私たちは、核燃料の連鎖と決別」しなくては行けないと訴えました。「核技術はいかなる小さな過失をも許さないものであり、ひとたび事故が起こればそれは取り返しのつかない結果をもたらすということを改めて私たちに見せつけました」。そして「歴史から学んできたように、核は反平和であり、反生命で、また、反市民的で、世界で最も危険な原発地帯である日中韓が脱原発を実現するためには、東アジアの市民社会の連帯が切実(な課題)です」と宣言し、東アジアの脱原発運動を展開し、ネットワークを広げていくことが確認されました。

ここに結集した、3.11以降の新しい市民運動の大きなうねりと連帯が、この世界を変えていく力となっていくことを願わずにはいられません。

浜岡原発の訴訟と市民活動について

会員 日置祥隆

私は東京在住の時、横須賀米海軍基地見学を企画した。その際、原子力空母G・ワシントンの横須賀母港化反対の市民グループと接触し、原子炉2基内蔵の空母の危険性について教えられ、原発により関心を持つようになっていた。一昨年6月名古屋転居後、名古屋の市民グループの集会に参加し「浜岡原発運転停止を求める市民の会」の活動を知った。

この会の立ち上げより2年前の2002年4月、静岡市民と弁護士による「浜岡原発をとめよう裁判の会」を原告とする原発運転差し止め請求により、静岡地裁で2003年10月から審理がスタートした。延べ35回の裁判の結果、2007年10月控訴棄却の敗訴となった。「原告らの生命、身体が侵害される具体的危険があるとみとめられない」というものである。原告は即時抗告、東京高裁で2008年9月から開始するも、2011年7月の第12回で中断している。2011年5月、管内閣総理大臣の「浜岡原発の全ての原子炉の停止要請」により「必要審理はほぼ尽きている」から「安全性が立証できなければ原発は止めるのが当たり前」(東京高裁岡久裁判長)と豹変しているのだ。

停止直後に中部電力が2012年末に津波防波堤を完成させ、3～5号機の再稼働をほのめかしたので、原告「浜岡原発3～5号の廃炉、及び1～2号を含む使用済み核燃料の安全保管を求める会」(静岡県、愛知県ほか275名の弁護士、湖西市元市長、城南信金理

事長なども原告参加)が静岡地裁へあらためて提訴、2011年10月開始、2012年3月に第3回口頭弁論が予定され、また原告「浜岡原発の永久停止を求める浜松の会」も静岡地裁浜松支部に控訴、審理に入っている。

そうした中で名古屋市民グループは近隣の岐阜、三重、長野など各県と連携強化し、街頭アピール、デモ行進などを続け、100万筆を超える署名の要請を獲得。静岡、浜松市民グループと共に中部電力に提出し、2011年5月当初の目標を達成したとして署名活動を終了した。その後本年1月、浜松市民グループは「永久停止要請」の署名約11万名を経産省に提出請願し、活動継続中である。浜岡原発の再稼働は静岡の県、地元市町村の拒否が確実視されておりストップできると思う。

浜岡だけでなく、地裁で認可したあと最高裁で逆転棄却のものじゅ訴訟、高裁で逆転棄却の滋賀原発も同様である。

「理論の通らない世界、一部の人間の利権や原発は国策だという意識がある」(石橋克彦)。「この10年間20連敗。徒労感と屈辱感でいっぱい。普通の環境問題と違うところ」(河合弘之弁護士)。これらの言葉からも、国側の尊大さがみえよう。

「訴訟闘争は市民活動の支えが欠かせない。いわば車の両輪なのだ。」(河合弘之)

まだまだ続く大飯原発、上関原発、大間原発、玄海原発など、「訴訟と市民活動」に協力していかなければならない。

上関原発計画をめぐる状況について

理事 前田恵子

2012年1月に開催された脱原発世界会議には数多くのプログラムがあり、「上関原発どうするネット」の持ち込み企画「原発反対30年!! 未来に輝け上関・祝島」も盛況で、現地からのスピーカーによる原発に頼らない地域の自立のための取り組み報告には立ち見が出たそう。また長年、この予定地の生態系を守るべく、研究・保護活動を進めて建設の阻止に貢献した「長島の自然を守る会」が自然保護協会から沼田眞賞を受賞したことも記しておきたい。

上関原発建設計画の現状をお伝える。結論から言うと2012年2月現在、工事はほぼ止まっている状況である。東電原発事故後、山口県内の11市(13市中)の議会で上関原発計画の建設中止や凍結を求める請願や意見書採択があり、「国策だから」と進めてきた県知事も「このままでは建設を認める状況にない」との判断をしている。2012年10月の埋め立て竣工は絶望的であり、許可の延長の申請がない限り埋め立て免許は失効する。

ただ「建設は白紙撤回」の声が知事や上関町長から発せられることはない。歯切れが悪いのは「原発政策からの脱却」「新規増設建設はなし」という明確な政府の方針決定がないためである。事業者である中国電力は未だ建設すると豪語している。建設予定地は原発建設には地質学的にも条件を充たした適地なのだと言う。彼らの言う適地というのは「人目に付かない」が最優先であり、「原発しかもう望みを託せない」と切羽詰った財政問題を抱

えた自治体だということである。

予定地は橋一つで本土と繋がれた島の突端の海岸であり、海底から湧水の湧く藻場を埋め立てての建設計画である。素人目にも地質学上、適地だとは思えない。原発推進が最大目標のあの保安院から「ボーリング調査不完全」との評価を受けて地質調査やり直しを命ぜられたさなかにあの事故は起きたのである。

事故が起きなくても電力を原発に依存することはやめるべきだと考えてきた。放射性廃棄物は低レベルから高レベルと多様だが日本の核開発の根幹となっている核燃料サイクルから生じる廃液の危険性は地球環境をも破壊する猛毒性を有し、その処理方法に解決策はない。しかも事故は起こり収束の目途も立たず地震がやむことはない。全国のトイレの便座やコンビニの前にある自動販売機を24時間動かす電力をも確保するためにこれ以上危険を冒すのは正気の沙汰とは思えない。

ただ原発からの脱却はライフスタイルの問題にするのではなく経済面から見た仕組みの是正が有効だと考えている。有体に言っても原発は割に合わないのである。核燃料サイクルをきっぱりやめることで仕組みは大きく変わる。電気料金から徴収し積み立てられている原発埋蔵金を被災者への賠償に充てること等。事故前ではあるが経産省は米国への原発輸出についての融資不足には年金などの公的資金を充てるなどと言っていた。これを許せる人がいるだろうか？ 重大事故の尻拭いを電気料金で徴収され、核兵器としてしか用途のないプルトニウム製造のために搾り取られることをもう私たちは拒否しようではないか。

【脱原発世界会議】

「原発体制を問うキリスト者ネット」「もちこみ企画」報告

理事 大橋祐治

私は昨年発足したばかりのNGO「原発体制を問うキリスト者ネット」に入会しましたが、このNGOが【脱原発世界会議】に“もちこみ企画”として参加した2つのシンポジウムの報告をかねて、「原発体制を問うキリスト者ネット」について紹介いたします。

1. もちこみ企画Ⅰーシンポジウム

「国内原発立地地区の市民運動が

かかえる困難さと今後の課題」

…1月14日(土)13:00~14:30

福島事故後も変わらず原発立地地区の地域で反原発運動の壁になっているものの正体は何なのか？ 六ヶ所村、浜岡、玄海を持つ各地方で原発反対運動に関わってこられ、地域社会の実態を熟知し、その中で運動の困難さを経験してこられた方々をパネリストとして招き、報告と質疑応答が行われました。140名収容の会場はほぼ埋め尽くされた参加者でした。メインホールでの開会イベントと同時並行で開催されたことを考えると、このシンポジウムのへの関心の高まりを示すものと思いました。六ヶ所村は、日本キリスト教団八戸北伝道所岩田雅一牧師、浜岡は日本福音ルーテル稔台教会内藤新吾牧師、玄海は、「玄海原発プルサーマル裁判の会」代表石丸初美氏がそれぞれ報告されました。司会は日本YWCA理事長の鈴木玲子氏でした。

2. もちこみ企画Ⅱーシンポジウム

「アジアの原発廃絶にむけて」

…1月14日(土)17:00~18:30

国際原発村の実態の可視化と、反原発のアジアの市民レベルの連帯・連携がいまこそ重要との認識で、モンゴル・緑の党党首セレンゲ・ラグヴァジャヴさん、韓国・反核教授の会代表 李元榮(イ・ウォニョン)、浜岡原発・内藤新吾牧師の問題提起のもとに、アジアの原発開発・輸出入禁止、死の灰他国埋設禁止の方向性を話し合うシンポジウムでした。「…キリスト者ネット」は原子力利用の停止にむけて、国内グループとの連携のみならず海外、特に東アジア諸国の脱原発、反原発の活動と連携を取ることも目的としております。詳細を知る立場にありませんが、モンゴルのセレンゲ・ラグヴァジャヴさん、韓国の李元榮(イ・ウォニョン)、いずれも世界会議が招聘した30数カ国のメンバーの方々です。

3. 「原発体制を問うキリスト者ネット」

について

① 発足の経緯

脱原発を目指すキリスト者が個人として、それぞれが所属するカトリック、プロテスタントの各派の壁を越えて超教派的に活動しようとする団体です。キリスト教界の政治・社会との距離の取り方は大変難しい問題ですが、それだ

けに各教派の基本姿勢は政治・社会と距離を置こうとする傾向にあります。キリスト教界で福音派(伝道に専念)だとか社会派(社会との関わりも重視)だとか言われる事柄ですが、日本では各派の中心は福音派が占めているケースが多い現状です。「キリスト者ネット」は社会派と言われる信仰の立場に立った牧師、信徒の脱原発を目指したネットワークづくりであると言えるでしょう。

「キリスト者ネット」は昨年8月頃に活動を本格化しました。今年2月下旬に設立総会を開いて規約や代表者などを決定し、4月に総会を開くという現在進行形のNGOです。しかし、浜岡原発廃炉に向けて長年、市民と共に先頭に立って活動されてきた内藤新吾牧師、日本YWCA理事長鈴木怜子氏、様々な反差別で活動されてきた在日韓国人の崔勝久(チェ・スング)氏などがメンバーとして参加されており、ボランティアの事務局の方々の行動力とスピード感に支えられて今後の展開が注目されています。

② 日本YWCAの『核』否定の思想

日本YWCAの『核』否定の思想に立ったこれまでの40年以上の活動が「キリスト者ネット」の立ち上げの背中を押したことを知りました。日本YWCAは1970年の全国総会で、「『核』否定の思想に立つ」を運動の強調点に掲げ、この思想は今日までYWCA運動の象徴となってきたとのことです。

「人間の作り出した『核』エネルギーは、ひたすら軍事目的に利用され、…そのことに目をつぶって、原子力の将来を夢見ることにはできない。それでは核問題の本質を理解するこ

とはできない」「『核』を頂点とした現代文明に否を言うこと…その中には当然原発が含まれる」。

日本で原発が稼働しはじめた今から40年前の全国運動の展開であり、その卓見に目を見張りました。この時の理事長は関屋綾子氏で初代文部大臣森有礼の孫、岩倉具視のひ孫です。

③ 活動方針(案・2月の設立総会で決定)

・目的:

放射能被害者救済と原発廃炉に向けた内外のネットワークづくり

・事業:

上記目的に沿った具体的な事業を展開、必要に応じ講演会、学習会等の開催、インターネットを活用した広報活動などによりネットワークを広げ、日本内外、会員内外の活動を進める

・その他:

代表1名、事務局長1名を置く。会費は年間一口2,000円(なるべく二口以上)、目的に応じて適時募金

④ 具体的活動の状況

脱原発世界会議で2つのシンポジウムを主催したこと、韓国、モンゴルの反原発運動の団体と既に連携を進めていること、6月には六ヶ所村見学ツアーと青森での千人規模の集会を企画中(6月8日函館で大間(おおま)裁判の意見陳述)であるなど、まさに走りながら考える企画力、行動力、スピードにはただただ感嘆するのみです。エネルギーを感じます。このエネルギーのぶつかり合いが相乗効果を出していくことを願ってやみません。

求められること、できることなら何でも

理事 安藤 博

〈非暴力平和隊・日本〉(NPJ)や〈九条の会〉のお仲間たちが、2011/3/11以降「脱原発」行動に力を入れ、〈脱原発世界会議〉(2012/1/14-15。本誌大畑稿など参照)など原発廃止を目指す集会やデモが各地で行なわれているなかで、私は自分がたまたまの縁に関わることになった原発関係の活動について語ることを控え目にしています。住友金属工業のエンジニアだった山田恭暉さんの呼びかけで、東日本大震災から間もなく発足した【福島原発行動隊】のメンバーとして、福島で行なっている除染などの活動です。

どうして「控えめ」か—私の原発に対する姿勢は(「推進派」ではなかったものの)「容認派」だったのが3/11を機に転向した、いわば付け焼刃の「脱」で、その引け目があるからです。そして、私が目下原発に関わる活動の足場にしている【行動隊】は、必ずしも「脱」ではありません。メンバーが個々に、例えば「原発維持・推進」で活動することは全く自由ですが、【行動隊】が組織として、例えば「脱原発」の活動をするのはしない、いわば〈原発 Non Partisanship〉を基本方針としているのです(注「福島原発行動隊の基本的立場」)。

【行動隊】はただ一点、原発事故の収束を目指しています。そして、事故を起こした福島第一原発に近いところでいま収束作業に当たっている「若い世代の放射能被曝を軽減するため、比較的被曝の害の少ない退役技術者・技能者を中心とする高齢者が、長年培った経験

と能力を活用し、現場におもむいて行動することを目的」とし、「原則として60歳以上(シニア)、現場作業に耐える体力・経験を有すること」を基準に参加を募りました。この「シニア」を捉えて、マスコミが「老人決死隊」などと冷やかしたりします。が、決して「決死」だの「特攻」を志すものではありません。活動中に万一事故にあった場合には労災を受けられるよう、社団法人の登録をし、放射線測定に関する法制に適うようトレーニングを受けるなど、万全の備えをしています。

ところで、「推進」「反・脱」いずれの立場もならず、「事故の収束を目指す」ことは、原発の維持・再開をはかる電力会社、日本政府に加担するものとされるかもしれません。首尾よく事故収束ができたあかつきには、たとえば浜岡原発の再開に利する可能性を持っているのです。

とはいえ、先の見えない不安を、東京電力という地域独占企業の秘密主義、独善主義に委ね、またこの企業の横暴に手をこまねいている日本の政府に任せておくわけにはいかない、原発をどうするかについて議論を尽くさねばならないが、目前の原発被害に何はともあれ取り組んでみよう—これが【行動隊】に加わっているひとの多くが考えていることです。いまある被害を多少なりとも軽くし、避難しているひとたちが一日も早くふるさとに戻れるようにするためなら、原発を必要と考えるひと、廃止しなければならないというひと、お互い

排斥し合わず一緒に活動できるはずだというわけです。

【行動隊】は、発足から半年程度で、全国から馳せ参じた参加者が約2000人。10万、100万単位も含めた寄付金が1,000万円を超えました(2012年1月26日現在、行動隊員677人、賛助会員1589人。寄附1,335万5,797円)。

しかし、2011年末にかけて頭打ちが見え始めました。東電の重層的下請け構造と政府の冷淡な態度に阻まれて本格的活動に入れずにいる事への苛立ちも出てきました。特に、原発建屋の建設に加わったこともあるような、腕に覚えのある「隊員」たちがそうで、「こんなことなら他にチャンスを求めよう」といった気持ちになっているひともあるようです。

【行動隊】は、近日中に「戦略チーム」を編成して今後の行きかたを検討することになっています。

それに引きかえ、特段の技術・技能を持たない「賛助会員」のわたくしは、別に苛立ったりあせったりすることはありません。ただ、「独楽は回っていないければ倒れてしまう」という思いで、【行動隊】メンバーの有志とく福島に「いこう！」という、ボランティア組織の中のボランティア活動(自主活動)を2011年の夏から始めています。東電や政府に断りを入れる必要のない20キロ圏外で【行動隊】メンバー以外にも参加を募り、地域のボランティア・グループと一緒に、草刈、どぶさらいなど、さしたる技術のいらぬ作業をしています。偶然の縁から、いわき市北部、原発サイトから29キロ程

度の久之浜という地域に、少人数の下見も含め2012年2月までに6回出かけています。「シニア」ではない学生なども加わっています。

2月18-19日には、民謡歌手、岬花江さんが園長をしている知的障害者施設「かもめ学園」の除染をしました。約1200坪の敷地内に、パン工房、集会所などがあって、その前庭の芝生剥ぎ取りや駐車場アスファルト舗装面の研磨などの作業です。



この活動は、地元の公民館が、地域住民に放射線量の測定や除染の方法を知ってもらうために企画した「除染体験教室」の一環でした。東京からバスで向かった私たち38人と、地域のボランティア・グループなど、合わせて約120人のイベントとなりました。

17日の予備作業も含めて3日間で学園敷地内の線量を3分の1程度、東京などと同じくらいまで下げることができました。岬園長は「一日も早く学園を再開して、地域の皆さんの憩いの場にしたい」と張り切っています。

「かもめ学園」の除染活動はかなりの力仕事と予想されたので、自分がコーチをした大学ボート部選手のOBに参加してもらいました。まだ「シニア」ではなく、現役サラリーマンです。

午前中の作業を終えた昼食時、地元の方たちが作ってくれた豚汁などをいただきながらの談笑で、このボートマンたちのことが話題になりました。

一人は重機を運転して小型プールくらいの大穴を掘る作業、あとの二人はスコップを振るって表土を剥ぎ取り一輪手押し車に積んで掘られた穴に捨てに行く文字通りの力仕事—3人は群を抜いた働きをしていたのですが、その上に彼らが大変なハンサムだというのでした。「ボート選手は、カオで選ぶの？」と聞くひとがいたので、「そうだ」と。そして、大日本帝国海軍のパイロットだった中学校担任の恩師がいつも言っていたことを思い出しながら言いました、「一カオ、ニアタマ、三カラダ！」。陸軍へのあてつけで言われていたという海軍士官の選抜規準です。

それを聞いて、放射線測定に腕前を振っている【行動隊】のシニア女性が鋭い突っ込みをいれてきました、「それじゃ、あなたはどうかやって選ばれたのよ!？」。「えー、僕の頃は、まだ、素朴に力仕事に向いているのを選んでいた」と答えるしかありませんでした。

福島第一原発の事故収束にある程度の目処が立つまでには、どんなに早くても10年はかかるでしょう。支援活動は息長く、だから肩

肘はらずにやっついていかねばなりません。被災地のひとびととのつながりを大切にして、「求められること、できることなら何でも」のつもりでいます。

注:「福島原発行動隊の基本的立場」(抜粋)(前略)行動隊の諸個人が、隊外において自己の信条に基づいて活動することはもちろん、隊内において心情を吐露することもまったく自由です。しかし一般社団法人(近い将来に公益社団法人へ移行する)福島原発行動隊としての発意や行動は、定款に定めた目的および事業に沿うものでなければならず、個々の意見はそのままでは公式の見解になりえません。(中略)

行動隊の結成を呼びかけた人びとも、それに呼応した人びとも、全員がそれぞれの想い、長い人生が醸成した種々の物語を抱懐しており、それをお互いに尊重しながら、ひとつの目的に結集し、各自の持てる積年の能力を駆使して未曾有の災厄に立ち向かうこと。これが福島原発行動隊、みるべきものはみてきた老人集団の基本的な立場です。

(2011年9月9日 文責:一般社団法人福島原発行動隊理事 平井吉夫)

✿ Book Guide ✿

『99%の反乱—ウォール街占拠運動のとらえ方』

バジリコ刊 サラ・ヴァン・ゲルダー+「YES! Magazine」編集部編
2012年 1200円+税

2011年9月、ニューヨーク・ウォール街で始まった占拠運動の思想と行動をいち早く伝える本である。グローバル資本主義がもたらす暴力に、「99%のわれわれ」はどのように対抗するか、問題提起する。

9条の輪をじわじわと広げよう

会員 川辺希和子

北九州において、今年6月23日に大畑豊理事による非暴カトレーニング講座を開催できることになった。時間も資金も経験も足りない中で、何かを企画し準備していくというのはと

北九州において、今年6月23日に大畑豊理事による非暴カトレーニング講座を開催できることになった。時間も資金も経験も足りない中で、何かを企画し準備していくというのはとても大変である。けれども「一緒にやればなんとかなるよ。」という仲間が数人集まれば、結構楽しくなる。そうやって女性数人で毎月開催してきた“九条守りたい”は、今月(2月)で38回目になる。それでも、遠方からの講師をお願いするには力不足でなかなか踏み出せなかったのだが、NPJに支援をしていただけということで非暴カトレーニング講座が開催可能となった。今回のような地域への講師派遣への援助を感謝すると同時に、どんどん積極的にNPJから地域へ講師を派遣して、非暴力講座やNPの紛争地での活動報告をしていただきたいと思う。

自分も含めてだが、対話することが苦手な人が多い。意見が違おうと感情的になる。相手の言っていることによく耳を傾けず思い込みで判断する。わりと頻繁にそのような場面に出くわし、悲しくなる。もし、子どもの時から非暴カトレーニングを受けて育つことができれば、一人ひとりの人生も世の中も随分と変わってくるのではないかと思う。公教育で無理ならば、

例えば各地でのキリスト教会の子どもプログラムに入れるとか、何かいい方法はないだろうか。

北九州で、様々な問題や平和への取り組みとして多くのデモや集会が開かれているが、若い人達や今まで参加したことのない人達にもっと働きかけようとする動きがある。その一つに、昨年初めて開催された「第1回北九州9条まつり」がある。5月3日は毎年「北九州憲法集会」が開催されているが、閉じた空間だけではなく市民の目に届く野外(公園)で、「一緒に楽しんで学んで9条の輪を広げよう！」ということである。人もお金も時間もない中で企画であったが、三線コンサート、賞品付き「憲法前文穴埋めクイズ」、地域の9条の会や平和団体の交流やアピール、物品販売等も行い、ささやかながら通行人や公園で遊ぶ親子連れの参加もあり楽しい会であった。個人的なことだが、娘たちが行くなら・・・と、夫も来てくれたことと、長机の運搬を依頼した方が家族全員で最後まで参加してくださったことは、予想外でうれしかった。家族やご近所や道行く人に、じわじわと9条の輪を広げていこうと、今年も「第2回北九州9条まつり」の準備が始まったところである。



非暴力平和隊 日本 2012年1月会計報告 2012年2月11日

	項目	2011年度予算	1月実績累計
1	参加費	45,000	23,300
2	会費	700,000	552,000
3	カンパ	500,000	415,700
4	雑収入	5,000	39,823
5	経常収入計	1,250,000	1,030,823
6	発送配達費	100,000	76,315
7	給料手当	360,000	300,000
8	事務所賃貸料	240,000	220,000
9	振込料	17,000	12,050
10	事務費	60,000	33,649
11	旅費交通費	90,000	136,740
12	通信費	29,000	23,300
13	雑費	8,000	2,520
14	広報費	110,000	89,250
15	活動支援費		① 326,500
15	会場費	467,014	26,850
16	講師費用		25,000
17	予備費	100,000	
18	東日本大震災支援	500,000	300,000
19	経常支出計	2,081,014	1,572,174
20	当期経常収支過不足	(831,014)	(541,351)
21	前期繰越剰余	1,085,946	1,085,946
22	今期経常繰越剰余金	254,932	544,595
23	特別収支残高	3,477,310	② 3,177,310
24	未払金		46,460
25	残高合計(29+30)	3,251,174	3,768,365

注記: ① 306,500 円はNP本部に緊急支援(1/11)、20,000 円は脱原発世界会議共同ブース参画

② 東日本大震災支援:1,000,000 円(経常会計 500,000 円、特別会計 500,000 円)

支出:5月経常収支より 300,000 円、10月特別収支より 300,000 円



Nonviolent Peaceforce

非暴力平和隊の理念と活動に賛同・支援して下さる個人および団体を会員として募集しています。入会のお申込みは、**郵便振替、銀行振込、非暴力平和隊・日本のウェブサイトの入会申込ページ**をご利用くださいますようお願いいたします。

◎ 正会員 (議決権あり)

- ・ 一般個人: 10,000円
- ・ 学生個人: 3000円

* 団体は正会員にはなれません。

◎ 賛助会員 (議決権なし)

- ・ 一般個人: 5000円 (1口)
- ・ 学生個人: 2000円 (1口)
- ・ 団体 : 10,000円 (1口)

■ 郵便振替: 00110-0-462182 加入者名: NPJ

* 通信欄に会員の種類を(賛助会員の場合は口数も)ご明記ください。

銀行振込: 三井住友銀行 白山支店 普通 6622651 口座名義: NPJ代表 大畑豊

* 銀行振込をご利用の場合は、お手数ですが電話・ファックス・メールのいずれかを
通じて入会希望の旨、NPJ事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

ウェブサイトからのお申込み: http://np-japan.org/4_todo/todo.htm#member

◎ 冬季カンパ御礼(2月25日到着分まで) ◎◎

30名の方々より合計 208,000 円の冬季カンパをいただきました。ありがとうございます。

大島みどり、荻野真理子、岡崎善郎、広段隆、八木俊充、柳康雄、西富房江、
高柳博一、中村雄介、野島大輔、馬渡雪子、大橋祐治、川辺希和子、日置祥隆、
西内勝、遠藤夏緒、前田恵子、鬼木昌留、渡辺俣子、大畑豊、木村護郎、丹波孝、
酒井良治、長田志野、安藤博、中村健、武井由貴、君島東彦、青木護、
みのおピースリボンの会 (敬称略)

≡ Book Review ≡

『真の文明は人を殺さず—田中正造の言葉に学ぶ明日の日本』

小松裕著 小学館 2011年 1400円+税

3/11の大震災、大津波、原発事故のあと、わたしたちが再発見したもののひとつは、田中正造である。「真の文明は 山を荒らさず 川を荒らさず 村を破らず 人を殺さざるべし」(1912年6月17日)。田中正造の思想には、近代文明そのものに対する痛烈な批判と、それを克服していく道筋に関する多くのヒントが含まれている。本書は、30年以上にわたって田中正造を研究し、彼の思想の可能性を読み取ってきた著者が、3/11以後、改めて、田中正造の思想のエッセンスをまとめたものだ。(君島)